

『世界のすべてが敵だとしても』

著：ふゆの仁子

ill：海老原由里

崇生は、どれだけ辛かろうが現実を突きつけて、選択する時間をオレに与えてくれた。

今さらながらにそれを認識して、思わず笑ってしまう。

「——笑うなんて失礼だろう」

「ご、めん。崇生の言うことはもっともなんだけど、ちょっと、思い出し笑い」

オレも大概天邪鬼(あまのじゃく)だが、阿部はオレ以上に天邪鬼な男だ。もちろん、この男に普通に考え直したほうがいいと言われたところで、オレが素直にうんと言うわけもない。

だがあんなふうに言われたら、余計にオレはムキになるタイプだ。

もしかしたら、いちいちオレが阿部に突っかかってしまうのも、似たタイプだからかもしれない。

「何を笑ってるのかは知らないが、とにかく無茶はしないでくれ」

「——珍し」

思ってるそばから普通に言われて、オレは正直な感想を口にしてしまう。そんな失礼なことを言うオレを阿部はちらりと横目で眺めて、「悪いか」と短く言い放つ。

「千裕は俺がいつも冗談で言ってると思ってたかもしれないが、毎回本気で言ってる」

腹にあった手がそこから離れて、ゆっくりと前に伸ばされる。どこへ向かうのかと追っていた指先がオレの頬を滑る。

「崇、生……」

「もちろん千裕が本気で、結城の祖父さんを護るつもりだとわかってる。そしてまるで赤の他人の結城の孫までも、護ろうとしてるのも知ってる」

指の腹が優しく目尻から顎の線を辿(たど)っていく。指先にまで神経を行き届かせたその優しい動きから、なぜか逃れることができない。じれったいほどにゆっくり、それから優しく、肌に触れていく。どうしてなのか、なぜなんだろう。そういうことを考えさせないほどに。

「でも本気だからこそ、無茶はさせられないと思った。この一週間でわかっただろうが、一步自分の部屋から出れば、本当に周囲は敵だらけかもしれない。ただ脅しだけではすまない。本気であいつら、命を狙ってくる。それも誰が犯人かもわからないように完璧な手はずで」

どくんと心臓が大きく鼓動する。

「それがわかってやはりやめると言ったとしても、誰も文句は言わない。それは最初から、俺たちの間で決めていた。最終的な披露パーティーまでは無理でも、せめて最初の顔見世の前の夜までに、千裕がやっぱり降りたいと言ったら、逃がしてやろうと。顔を知られたら最後、きちんと決着をつけるまで、もう逃げ場はない。だから、今夜がリミットだ」

もう一度、鼓動が高鳴る。

「最後の確認だ。無理だと思うなら、正直に言ってくれ。計画の変更は致し方ないが、それでもなんとかやっていける。今日まで、本気で取り組んでくれたのはみんな、知ってる」

本気の言葉に、掌に力が籠もる。

「赤の他人の結城の孫に自分の姿を重ねて、真剣な気持ちで護るつもりでいたことを、みんな知ってる。きっと……結城の孫も、その事実を知ったら俺たちと同じことを思うだろう。お仕着せの正義感ではなくて、本気だということに、感激すると——俺は、思う」

心を揺さぶるような低音が心臓を素手で掴んでいく。ぎゅっと絞られるような痛み、胸が苦しくなる。

僅かに見上げる高さにある男の瞳に映し出されたオレは、その男をじっと見つめている。揺れる瞳の中で阿部のことだけを。

「……崇生」

「だから俺も本気で千裕を護る。周囲にいる人間が信じられなくなることになっても、世界のすべてが敵だとしても、たった一人、俺だけはお前の味方だ。それは信じてほしい」

頬にあった手が頭の後ろにまで回り、そのままゆっくり阿部の胸に引き寄せられる。

押しつけられるシャツを通し、阿部の鼓動が聞こえてくる。

トクトクと規則正しい音に、オレは安心させられる。母親の胸に抱かれる子どもみたいな、そんな感じに近いのかもしれない。

同僚には、きつい仕事のあと、彼女の胸に頭を沈めることで、心を落ち着かせる者もいた。

この状態でその気持ちが、なんとなく理解できてしまうオレは、何か変なんだろうか。

「やめるか」

頭にそっと額が押しつけられるのがわかる。

「それとも——続けるか？」

ここでオレが引いても、誰も責めないという阿部の言葉は事実だろう。阿部はもちろん、樫尾に堀江、計画に携わっただろう護衛部の人間、そして結城も、一人として文句ひとつ言うことなく、オレが安全に生きていけるよう、全力を尽くしてくれるだろう。

でも、オレの決意に変わりはない。

ここまで言ってくれるからこそ、何がなんでも協力したいと思う。

己のために、そして、結城の孫のために。『世界のすべてが敵だとしても、俺はお前を護ってやる』という阿部の言葉は、泣きたいほどに嬉しかった。もし結城の孫がそんな立場にいるのだとしたら、オレが彼に教えてやりたい。

一人ではないこと。君のことを愛する人間が、大勢いること。

すべての人間が、亡き者にしたいと思っているわけではないこと。なんのかわりもなかったはずの人間でさえ、命を賭けることができる存在であること。

いつの日にか彼が結城のトップに立つ日があったときに、現当主のように、人々から信頼されるためにも、彼が人を信頼できなければならない。

結城がオレの祖父さんを信用したように——。

「——やるよ」

阿部の胸を両手で押し返して、オレは視線を地面に向けたまま自分の気持ちを告

げる。

「千裕」

「心遣いには感謝してる。ここで逃げても責めないでくれると言ったことも、信用していないわけじゃない」

「だったら……」

「でもっ！」

オレは反論しようとする阿部の言葉を遮った。

「でもだからこそ、オレはやり遂げる。オレは確かに、まるで関係のない人間のために、命を賭けようとしてる。でも、そんなオレのことを信用して、護ると言ってくれた崇生や、ガーディアンの気持ちを裏切りたくない」

心の奥底で、明確になっていなかった自分の気持ちがはっきり見えてくる。

両足がしっかりと地に着いて、前をしっかりと見据えるだけの根性もついた。

引き受けたときにはまだ、目の前に迫る現実がどこか夢のように思っていた。だが今は違う。事実として認識できて、危険も十二分に承知している。

その上で、どこへ進み、何をすべきか。具体的に言葉にできなくても、迷いはない。

「いいのか」

視線を逸らすことなく、阿部はオレに確認してくる。心の底まで魅入れられそうな強い瞳から、オレも視線を逸らすことができない。

握った掌に汗が滲み、体の芯が痺れてくるような錯覚に襲われながら、はっきりと頷いた。

本文 p105～110 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>